

---

# 乗せた首

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

乗せた首

### 【Nコード】

N6005D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

室町時代。戦乱に参加した奥田勝宏は死んだと思っていたが何と首が離れてしまっていただけで。少しコミカルに書いてみました。

## 第一章

乗せた首

室町時代のことである。当時天下の六分の一は山名氏が押さええていた。

その権勢は將軍家をも凌ぎ六分の一殿とまで呼ばれていた。その権勢は当然ながら当の將軍家を警戒させるに充分であり室町幕府としては彼等を潰す機会を窺っていた。

この時の將軍は足利義満であった。謀略に長けた男であり山名氏に対してもそれを發揮した。とりわけ挑発を効果的に用いそれに乗ってしまった山名氏の主山名氏清は京都に攻め上がった。これが明德の乱である。

結果としてこれは山名氏の敗北に終わった。彼等の足並みの乱れと幕府軍に有力大名が集まっていたことから戦いは予想以上にあっさりと終わった。山名氏清は戦死し山名氏はその勢力を大きく後退させることになる。

その戦乱が終わった京都。街中には討ち死にした山名氏の者達の屍が転がっている。

「それにしてもよくもまあ」

「ここまで派手にやられたものだ」

戦乱を避けて都を出、ようやく戻って来た都の者達は倒れ伏す山名兵共を見て口々に言う。

「これが六分の一殿の果てとはな」

「思えば悲しいことだて」

そんなことを言い合いながら屍を葬っていた。首を取られた屍も多く奥田勝宏の屍もそうであった。

彼の屍は首実験の後で身体と一緒に穴に放り込まれた。放り込んだ者はそのまま立ち去る。しかしそこでふと妙なことが起こったのであった。

「むっ」

首を切られ当然ながら動くことはなかった勝宏の目が動いた。そうして辺りを見回しだしたのだ。

見ればそこは穴の中であった。自分と一緒に多くの兵の屍がある。どれも血に塗れて土に汚れている。勇ましい鎧もこうなっては実にみすばらしいものだ。

「わしは。死んだのではなかったか」

彼はそう呟きながらこれまでのことを思い出す。一騎打ちに敗れ首を跳ねられた。刀が横薙ぎにはらわれたのを見たのが最後の光景であった。

それはしつかりと覚えている。だからこそ死んだと思っていたのだ。だがこうして今日が見えている。一体どうしたことかといぶかしむことしきりであった。

だが彼もあれこれ考える男ではなかった。穴の中は狭い。それも周りは屍ばかりなので見飽きてしまった。

「それにじゃ」

次にあることを思い出した。

「ここは死人を葬る穴じゃな。このままいると」

埋められる。そうなっては折角目覚めたのにどうしようもない。

彼としてはすぐに出なければならなかった。

といつても今は首だけのようだ。首を切られたのだからそれはわかる。自分の身体を探すことにした。

少し見れば側に転がっていた。首のない屍がそれであった。

「おい」

自分の身体に呼びかける。するとぴくりと動いたように見えた。それを見て何か脈があると思った。それでまた声をかけた。

「起きろ」

命令した。すると本当に起き上がった。

動くように思うと立ち上がった。それを見ていけると確信した。首を持つように念じる。すると起き上がった身体は勝宏の首を手

に持った。そうして身体の小脇に抱えてしまった。そのまま穴を出ようと身を乗り出させると見事にでられた。こうして何とか難は避けられたのであった。

ところがすぐに別の難がやって来た。それは穴を出たところにあつた。

「う、うわっ！」

「ば、化け物！」

「何っ、化け物とな」

穴を出たところに幕府の兵達がいたのだ。彼の姿を見て一斉に驚きの声をあげたのである。

「首がないぞ！」

「脇に抱えてるぞ！」

「ふむ」

その敵兵達の言葉を聞いてあらためて自分の姿を思い浮かべる。思えば確かに恐ろしい姿である。

「確かにのう。そんな者を見ればわしとて」

「何とかしろ！」

「しかしどうするんだ！」

兵達は完全に怖気づいていた。勝宏はそんな彼等を見て今の自分がどれだけ恐ろしい姿をしているのかあらためて気付いた。そのうえで彼等に声をかけた。

「おい」

「な、何だ？」

「喋ったぞ」

「戦は終わったのだな」

「そう兵達に尋ねる。」

「山名が敗れて」

「そ、そうだ」

「それは貴殿も承知の筈だ」

兵達は腰を抜かして震えながらも彼に説明する。これは彼もわか

っていた。

「そうじゃのう。ではわしも何もせん」

「何もせんだと」

「化け物でもか」

「わしは化け物ではない」

むっとして言い返す。流石に化け物化け物と連呼されては気分がよくない。

「この通り生きておるではないか」

「しかしな」

「そうだそうだ」

兵達はそんな彼に言い返す。

## 第二章

「実際に首がないではないか」

「小脇に抱えておるではないか」

「どうしてこうなったかわしもわからんのだ」

そう彼等に言う。

「わからない？」

「左様」

困った顔で答える。

「首を切られたことはわかっておるのだが。どうしてこうなったか  
というと」

「そうか」

「何分経験もないことだしな」

あればあればで恐ろしいことだがこう述べた。

「真にどうすればよいか」

「そうじゃのう」

「わし等も戦で長いことおるが」

兵達も腕を組み首を傾げさせる。そのうえで勝宏に対して言う。

「こんなことははじめてだしな」

「さて。どうしたものか」

「御主等の主は誰だ？」

勝宏は兵達に尋ねた。

「よければ教えてくれぬか」

「わし等のか」

「そうじゃ」

彼等に対して言う。

「このままでは落ち着かぬ。やはり首は肩の上にあるものだからな」

「そうじゃな」

「わしとて首がそんなところであれば困るわ」

「では。教えてくれるか？」

また兵達に願ひ出た。

「見識のある方ならば御存知だと思つのでな」

「わかつた」

兵達は彼の言葉に頷いた。何かようやくといった感じであつた。

「では言おう」

「我等の主は」

「うむ」

固唾を飲む。一体誰なのかと。

「室町様じゃ」

「室町様が」

即ち將軍である足利義満である。幼い頃より後見役である細川から厳格な教育を受けておりその見識もかなりのものである。伊達に將軍をしているわけではないということである。

「左様。お目通りしたいか？」

「是非共」

彼等にまた述べる。

「頼みたい」

「わかつた。ではついてきてくれ」

兵達は親切に彼に自分達について来るように言う。だがここで一言付け加えてきた。

「ただしだ」

「ただし？」

「そのままでは来るな」

眉を顰めさせて勝宏に言う。

「そのままとはな」

「だから首じゃ」

また彼に対して言った。

「幾ら何でもその姿では」

「ここからは出られぬぞ」

「うつむ。そうじゃな」

言われて気付く。確かにその通りだ。

「ではどうすればよいかのう」

「とにかく首じゃ」

兵の一人が彼に告げた。

「それをどうにかせねば」

「そうじゃ。それでじゃ」

別の一人がここでふと思いついた。

「首を元の場所に乗せればいい」

「元の場所にか」

「それはできるであろう」

勝宏に対して問う。

「どうじゃ？できるか？」

「うむ。とりあえずはな」

兵達の言葉に頷く。そうして両手を使って首を肩と肩の間に乗せた。それは上手いきとりあえず見てくれだけは普通になった。

「どうじゃ？」

「動くな」

勝宏は困った顔になっていた。少し動けばその分だけ首がずれてしまうのだ。その不安定な首で困った顔を見せていた。

「困ったことじゃ」

「まあそれは仕方ない」

兵の一人が彼に告げた。

「とりあえずはそれで普通に見えることだし」

「公方様のところに行こうぞ」

「案内してくれるか」

「これで普通の者ならばそうはしていない」

「その通りじゃ」

兵達は苦笑いを浮かべて彼に告げた。

「今頃わし等が討ち取って手柄にしておる」

「もう首が取れぬから連れて行ってやるのじゃ」

「何じゃ、そうなのか」

二人のあまりにもシビアな言葉にいささか辟易したような感触を受けた。それで自分の顔を微妙に歪めさせたのであった。

「せちがらいのう」

「何を言う、戦じゃぞ」

「御主もそうしていたであろう」

「確かにな」

言われてみればその通りである。自分で頷く。

### 第三章

「そうしておるな、わしも」

「わかつたなら行くぞ」

「よいか」

「うむ」

あらためて二人の言葉に頷き後をついて行く。そうして幕で覆われた本陣の中に入って行く。見れば勝ちを祝うのか琴や鼓の音が聞こえ笑い声まで聞こえる。かなり楽しく宴を開いているようである。それは外からもわかつた。

「おい」

兵達は警護の同僚に声をかけた。見れば彼も少し酔っていた。

「上様はおられるか？」

「ここに」

「うむ、楽しくやっておられるぞ」

警護の兵は少し赤くなった顔で彼等に伝えてきた。

「丁度盛大に楽しまれておる」

「なら都合がよいな」

「おい」

それを聞いてから後ろの勝宏に声をかけた。

「おられるそうだ」

「ではよいな」

「うむ」

「おっと、その前にだ」

ここで警護の兵が三人に対して声をかけてきた。

「何だ？」

（まさか）

勝宏はいきなり呼び止められてどきりとした。まさか今の自分のことがばれたのではないかと思ったのだ。だが彼にとって幸いなこ

とにそれは違っていた。

「腰のものは置いておけよ」

「腰のもの？」

「だから刀じゃ」

そう勝宏と二人の兵に言ってきた。

「公方様の前だぞ」

兵はそう三人に告げる。

「まさかと思うがそんなものをぶら下げていくわけではあるまい」

「そうだったな」

言われてようやくそれに気付く。これまで自分のことばかり考えていてそこまでは気付いてはいなかった。彼もどうにも焦ってしまった。

「それでは」

「うむ」

勝宏から刀を受け取る。続いて。

「御主等もじゃ」

「わかっておる」

「では頼むぞ」

二人も腰にあるものを手渡す。こうして三人は身軽になって足利義満のところに向かうのであった。勝宏はその不安定な首を必死で調整しながら。それは警護の兵にも見えたが彼は特に変には思わなかった。これも運がいいと言えば運がよかった。

義満は兜を脱いで陣の中央の椅子に腰を下ろし朗らかに飲んでいった。周りの者を従えて右手に杯を持って上機嫌であった。三人はそこにやって来たのである。

「むっ」

最初に三人に気付いたのは義満自身であった。

「これそこな者」

そのうえで三人に声をかける。

「どうしたのじゃ。ここまで来て」

「はい、上様」

兵の一人が彼に頭を垂れて述べる。

「実は上様に顔を見せたい者がおりまして」

「顔をとな」

「そうです。宜しいでしょうか」

「その為に我等ここまで参上した次第です」

「ふうむ」

義満は二人を見た後で彼等の後ろに立っている勝宏を見た。見れば義満にとっては見たことのない顔であった。

「それはその者であるな」

「その通りです」

兵の一人が義満に答えた。

「この者ですが」

「宜しいでしょうか」

「さして危うい男でもなさそうじゃな」

勝宏を見てすぐにそう述べてきた。

「だが困っておる。違つか」

「おわかりなですか」

「ははは、わしじゃぞ」

義満は見抜かれて驚いている勝宏に対して笑ってみせてきた。

「足利義満じゃ。わからぬわけではあるまい」

「では」

「ただしどう困っておるかまではわからん」

そのうえで彼にこう告げてきた。

「そこまではな。それはこれから聞こう」

「有り難うございます」

勝宏はあらためて彼に対して頭を垂れた。敵の主であったが今はそんなことはどうでもよくなっていた。まずは自分の首である。

「ではお話ししましょう」

「これ」

周りの者に目を向けてから述べる。

「その方等は下がれ。よいな  
はっ」

周りの者を下がらせる。信頼できる者だけ残した。これも全ての気配りであった。中々どうしてそうしたことでもできる男であった。こうして勝宏を話し易くさせる。そのうえで話を聞くのであった。

「それではじゃ  
話をしやすくさせて勝宏に問うてきた。

「その方。どう困っておるのじゃ」

「実は首がおかしいのです」

「首とな」

義満は勝宏の言葉に目を少し動かしてきた。そのうえで彼の首の辺りをじつと見る。

「そういえば動きがちと妙であるな」

「おわかりですか」

「まるでただ上に乗せておるようじゃ」

やはり彼は鋭かった。

「違うかのう」

「うっ、それは」

「ふむ。やはりな」

勝宏の様子を見て自分の読みが正しいと確信した。その一見鈍そくな目が鋭くなった。その鋭い洞察力は天下人ならではであった。

「御主、この戦で首を刎ねられたな」

「はい」

素直に答える。

「その通りでございます。それで今は乗せているだけです」

「そうか。それでも生きているのか」

「これは一体。どういふことでございますしょう」

兵の一人が義満に問うた。

「首を刎ねられて生きておるなぞ」

「しかもこうして普通に話しているなぞ。これは」

「わしにもわからん」

義満は首を捻ってそう述べた。

「わしも色々話は聞いておるがこうしたことははじめてじゃ。死んだ者が生き返っただのそうした話は聞いたことはあるがな」

「私は生きています」

勝宏は必死な顔でそう述べた。

## 第四章

「この様に。御覧になられてますね」

「わかつておる。またこれはどうしたことなのか」

「どうすれば宜しいでしょうか」

勝宏は困り果てた顔で義満に問う。

「このままでは困ります。やはり首は肩の上にしっかりついてからこそなので」

「わかつておる。このままではそなたも不憫じゃ」

義満も考える目で述べる。

「これは。安倍殿に頼むか」

「安倍殿といえますとあの」

「うむ、あの安倍殿じゃ」

また兵の一人の言葉に応える。安倍といえは安倍清明を出した有名な陰陽師の家でありこの時代も代々朝廷の陰陽師を輩出しているのである。その筋の名家である。

「あの方ならば何とかしてくれるかもな」

「それではすぐに」

「まあ待て」

何とかしてくれるかもと聞いて希望で焦りだした勝宏に対して言う。

「焦ることはない。安倍殿のところへはわしが手紙を書いておく」

「手紙をですか」

「うむ。これ」

左右に残っていた腹心の一人に声をかける。

「紙と筆を」

「はい」

腹心はその言葉に頷く。程なくして紙と筆が持って来られ義満はそれにすらすらと何かを書いていく。それが終わるとすぐに勝宏達

に告げるのだった。

「これを持って安倍殿の屋敷まで行け」

「安倍様の」

「そうじゃ。事情は書いておいた」

そう勝宏に言う。

「これで大丈夫じゃ。きつとな」

「きつとですか」

「うむ。それにしてもものう」

あらためて勝宏を見る。

「御主。よく生きておるものじゃ、全く」

「まことに不思議です」

彼はまた言う。

「私もどうして生きているのか。何故でしょう」

「それも安倍殿が話してくれるだろう」

義満もこう言うしかない。如何に彼といえどこれまではわからなかった。

「わしが出来ることはここまでじゃ。それではな」

「はい。それでは」

勝宏は義満に対して頭を垂れる。そうして彼に礼を言うのだった。

「有り難うございました。ここまでして頂いて」

「世とて人じゃ」

義満は礼を述べた勝宏に対して言う。

「戦が終われば無駄な命を取ろうとまで思わぬ。そういふことじゃ」

「左様ですか」

「では行け」

また彼に告げる。

「吉報を待つておるぞ」

「はい」

勝宏はすぐに安倍の屋敷に向かった。屋敷の家まで来るともうそこには背の曲がった肌の黒い得体の知れぬ男がいた。

勝宏は彼の姿を見て眉を顰めさせる。不気味な男だと思った。

「何だ、こいつは」

「奥田勝宏殿か」

男は彼の名を問うてきた。

「わしの名を知っておるのか」

「如何にも」

肩の上の首のバランスを何とか取っている勝宏に対して答えた。

「話は聞いている。私が安倍だ」

「貴方が」

「そう。さあ」

その時男の身体がふっと消えた。そうして黒い公家の礼服を着た若い男になった。見れば流麗な整った顔をしている。何処か女性的な趣きさえある。

「その手に持っているのが室町殿からの手紙だな」

「はい。そうですか」

室町殿とは足利義満のことをさす。公家達は彼のことをそう呼んでいるのだ。

「大体的ことはわかっているが。読ませてもらえるか」

「勿論です」

勝宏は彼に手紙を差し出して述べた。

「その為に持って来たのですから」

「うむ。それでは」

「ええ。ところでですね」

片手で首を押さえもう片方の手で手紙を差し出しながら彼に問う。

「何か？」

「何故私がここに来るのがわかったのでしょうか。事情まで」

「教えてもらったのだ」

「教えてもらった？」

「そう。夢で閻魔大王にな」

すつと薄く笑ってそう述べる。

「御会いして教えてもらった。閻魔帳に載っていない死人が来ると」

「それはまさか」

「そう、それがそなただ」

安倍は彼に言った。

「奥田勝宏殿、貴殿だ」

「閻魔帳に名前が載っていないのですか」

閻魔帳のことは彼も知っている。それに載っていないと聞いてま  
ずは安心した。

「しかし私は今こうして」

「間違いは何処にでもある」

安倍は彼にそう告げた。

「間違つて死ぬこともな。そなたと同じように」

「私と同じようにですか」

「そうした場合は死なぬ。今のそなたのようにな」

「はあ」

ここまで聞いてようやく全てがわかった。全てを理解した彼はあ  
らためて思案する顔になるのだった。理解したうえである。

「それではですね。この首は」

「安心せよ。なおる」

安倍は穏やかな笑みと共に彼に言った。

「すぐにな。それにはだ」

「それには？」

「来るがいい」

彼に対して屋敷の中に入るように言う。

「庭の中の井戸までな」

「井戸ですか」

勝宏は井戸と聞いて目を丸くさせた。

「今水を飲んでもすぐに首から出てしまうので」

「何も飲む為ではない」

安倍はいぶかしむ彼に対して述べた。

「洗う為だ」

「洗う?」

「そう。いいから早く来るのだ」

「わかりました。それでは」

「うむ」

こうして彼は安倍の屋敷の中へと入り庭の井戸の前まで案内されたのであった。

見れば普通の井戸だ。勝宏はその井戸を見て安倍に問うた。

「ここですか」

「左様、ここだ」

安倍は穏やかだがしつかりとした様子で彼に答えた。

「ここがそなたを救う場所だ」

「ここがですか」

「さあ」

安倍は井戸から水を汲み出してきた。そうしてその水を勝宏に差し出す。

## 第五章

「まずは首をしっかりと肩と肩の間に置け」  
「はい」

言われるまま首を肩と肩の間に置く。しっかりと置いた。

「これで宜しいでしょうか」

「うむ。それではこれを首に塗れ」

「首にですか」

「それでそなたは助かる」

「この水ですか」

また彼に問う。まだ何か信じられない感じであった。

「それだけで」

「うむ。騙されたと思って塗ってみよ」

また彼に言う。

「それだけでよいからな」

「わかりました。それでは」

それを受けて水を手を取った。そうして実際に塗るのだった。するとすぐに。何かが大きく変わった。

「どうだ？」

「おや、何か」

自分でもすぐにその変化に気付いた。首を右手で擦ってみる。

「ついていきます。しっかりと」

「そうだろうな」

安倍は勝宏が驚く顔をしているのを見て頷いた。

「そうなる筈だ。何しろ」

「何しろ？」

「これは三途の川の水なのだ」

「三途の川の水、ですか」

「その通りだ」

また勝宏に対して答える。

「これこそがだ。わかったか」

「それはわかりましたが」

首がくつついた勝宏はまずはそのことに安堵した。しかしどうして井戸の水が三途の川の水なのか戸惑いながら安倍に尋ねるのだった。

「あの、どうして井戸の水が。それに」

「それに？」

「どうして三途の川の水で私の首がくつついたのでしょうか。どうにも話がわからなくて」

「それは簡単なことだ。よいか」

「はあ」

安倍は説明をはじめた。勝宏もそれをしつかりと聞く。

「水は三途の川の渡し守に頼んでここまで引いてもらった。特別にな」

「そうだったのですか」

「少し金を弾んだ」

若干苦笑いになった。どうにも結構な金を払ったようである。

「それでこうして引いてもらっているのだ」

「そうだったのですか。それで」

「後もう一つのだな」

勝宏がもう一つ聞いていたのを聞いていた。それについても説明する。

「ええ、まあ」

「くつついた理由だな。それは」

「それは？」

ぐつと息を飲む。彼の次の言葉を待つ。

「三途の川を渡れるのは死んだ者だけだ」

「そうらしいですね」

それは勝宏も聞いていた。あまりにも有名なので流石に知ってい

た。あの川は死の世界にあり当然ながらそれを渡れるのは死んだ者というわけだ。

「稀にまだ生きている者も渡る」

「その場合どうなるのですか？」

「今の通りだ」

勝宏のくつついた首を指差して言う。

「今の通りですか」

「戻される」

そう述べる。

「生きている世界にな。そういうことだ」

「だからですか」

勝宏は自分の首を右手で擦りながら述べた。

「今私の首がこうして繋がったのは」

「わかったか、これで」

「はい」

安倍の言葉にまた応えて頷く。

「全てわかりました。それにしても」

「それにしても？」

「不思議なことです」

首を捻つての言葉だった。

「こうして首が離れてまたくつつくとは。こんなことが起こるとは」

「何でも起こるものだ」

首を捻るその勝宏に対して答えた。

「この世の中というものはな。だから」

「こんなこともあるというわけですね」

どうにもまだ信じられないといった顔で述べる。落ち着いたとはいえまだ違和感が残っているというのもありそんな顔になっていたのだった。

「まあそうだ。では帰るのだな」

「はい」

安倍に対して言葉を返す。

「これで。ただ」

「ただ。何だ？」

「いえね。折角首がくつつきましたし」

笑いながら言う。今度は顔が苦笑いになっていた。

「もう二度と離れたくはないです」

「では侍は辞めるのか」

「そう考えています。切った切られたはもう」

また述べる。

「勘弁ですよ」

「そうか。では寺に入るのだな」

「そういうことです」

この時代はよく出家をする者がいた。戦国時代まではそうだったが武士も公家も出家する者が多かった。これも時代の風習の一つだった。帝も出家されて法皇となられる方が多かった。聖俗が厳しく分かれる江戸時代まではそうだったのだ。

「これからは。今までの戦での相手の供養をします」

「そうだな。いいことだ」

それは安倍もいいと言う。笑顔で。

「ではな。今度は寺で会おうぞ」

「はい」

二人は笑顔で別れる。勝宏は奇妙な事態から逃れることができた。だがこのことは今でもこうして話に残り人々に何かを見せているのだった。

乗せた首 完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6005d/>

---

乗せた首

2009年3月24日11時01分発行